

<落日の光> 雑木林の木々はようやくに芽を膨らませだしましたが、林の向こうからは光がまだ枝の間を通り抜けてきます。そんな中、落日の光で浮かび上がる雑木林(左)を前に、そしてあかね色に染まり始めた雲を背にした富士のシルエットが見られました。新芽で山や林が膨らむ直前に黄砂の飛来も一休みとなった日のことです。この後は高まる春の足音に耳を澄ませましょう。



<春の足音> オオイヌノフグリに少し遅れて春の七草の一つナズナの花がビオトープのあちこちで咲き出しました。ユキヤナギの花が咲き出すまでのほんの少しの間、ナズナの小さな白い花は野辺や民家の垣根で目に付きます。実の形が三味線のバチに似ていることから“ペンペン草 (シャミセン草)”という別名があります。“ペンペン草が生える”とか“ペンペン草も生えない”と言うようにあまり有り難くない表現に使われます。しかし陰干ししたものは盛んに民間薬として使われてきたようです。また子供の頃には実のついた茎を回し実の触れあう音で遊んだのではないのでしょうか。



<ナズナ>

流れの中では赤みがかって硬い葉をしていたセリがにわかには鮮やかな緑色に変わってきました。池の周りではカンアオイが残念なことに冬を越せずに終わりましたが、エビネは昨春より元気な様子で緑の芽が土の中から幾つも顔を出しています。一月ほど後の花が楽しみです。



<セリ>

<同居> 一度ならず触れてきたウツギの実は今も変わらず枝に留まっています。春をどのように迎えるのかと思っていました



が、実のつらな枝の付け根から新芽が顔を出しています。この分だともう2ヶ月ほど実の行く末を見守る必要があります。



<顔を出したエビネの芽>

<ウツギの実と新芽の同居>

大きく育ったサルノコシカケの仲間(下写真)とその傍らの草の緑に当たる日の光からも春の温もりが伝わるような気がしませんか。この問いかけはいささか強引でしょうか。そこで締めくくりには華やかな早春の写真を!



<カワツザクラ>

キャンパスではビオトープ近くのカワツザクラがまさに満開です。

(文と写真：松本正勝)